

一三八

新著陶集

八

新著聞集

俗談篇第十七

鈍狐害と云ひる

隣屋四人二火二活

悪馬徳了 馴る

急節 謀言

愚者 叮嚀

吉祥寺村 異獣

西陽小左衛門 狂人

夢中に書きたる



幸ふのりざりし

不運の賤^{さへ}なりけりて出^いとる

東光^{とうこう}法師^{ぼうし} 回国^{こくこく}

妙法蓮華^{めうぼうれんげ}經^{きやう}とを白^{しろ}る勅^{ちやく}書^{しよ}

痴^ち人^{にん}文^{ぶん}とあめじ

猶^{なほ}人のとあめじ

祖父^{そふ}の煙^{えん}取^と乃^な妻^{つま}如^{ごと}くほり出^いす

祖父^{そふ}の煙^{えん}一^{ひと}全^{ぜん}とほり出^いす經^{きやう}とる

宗^{そう}祿^{りく}常^{じやう}と咏^{えい}す

賤^{せん}婦^ふ歌^かて以^もて西^{さい}行^{ぎやう}と戲^ぎ論^{ろん}と

聖^{せい}粧^{じやう}威^い了^{りやう}れをわけて吟^{ぎん}とる

鄙^ひ悒^{いつ}の沙^さ門^{もん}遺^い書^{しよ}

貧^{ひん}人^{にん}全^{ぜん}とほり出^いす

古^こ代^{だい}質^{しつ}朴^{ぱく}

同^{どう}越^{えつ}の名^な同^{どう}越^{えつ}書^{しよ}

お袖をひききり人左の右の目言を返すに
ハ左の目言よりしをふゆと告りぬハ素
ぢきゆきけりハおぢーんをて娘が儀
了腹痛しぬ業とらへんらきよめり
うはやく癒きしゆゆらにとはぶやきゆく
了ゆーとぬれハ左の目言きりしてハ
疑もなき妖女のちりしうは業おらしく
もなきよほもはくゆしすくゆきせよせ
るゆきの戸とあめ口あめあてんて業
く

さて先服拾てゆらうとらう咽上ゆえ娘
後よりききえんああおれとあんくといと
鳴く取てはき報しあり又家来の者ハ
休の狐ときき報しあり未熟の狐了
妖換しありはれりし

隣屋に人二或二話

大坂八りんやの荒ものマ草笠で買物に源に
村よりゆらんを隣の家に行くとゆえ朝
出で書今日ハ親の命下りて業と業

入し賀嶋の氷よま来たけし勢一人と樹の擲干
少く樹と実益しにの者味も見何々雨りり
はとよ又味もよう同土付するまことと
のる一肉く豫て引るれと類て境内(若く
駒とひくして若の士の何と云くは後(と
若者も我ハ方ふいの大將擲園をあらうと名
れう(とく内にかし引水老後まては
云かして類スノ若後まては

愚者(と)嘆(と)

西尾因幡もろ勢ひのいぬあひくは橋出ねもろ
りま向へバ(と)延(と)了(と)答(と)應(と)り(と)海(と)也(と)我(と)
あまハ勢(と)も(と)知(と)り(と)る(と)ま(と)の(と)ま(と)笑(と)へ(と)は(と)
首(と)達(と)の(と)程(と)度(と)お(と)悔(と)り(と)せん(と)と(と)業(と)城(と)ま(と)よ(と)ひ(と)
膝(と)の(と)ま(と)ち(と)く(と)ま(と)る(と)取(と)を(と)只(と)一(と)ち(と)に(と)せ(と)ま(と)
因(と)州(と)ま(と)や(と)海(と)ま(と)は(と)ま(と)い(と)ら(と)る(と)科(と)だ(と)ま(と)
お(と)ま(と)の(と)ま(と)い(と)ま(と)向(と)ら(と)る(と)何(と)の(と)科(と)の(と)ま(と)ま(と)
く(と)ま(と)の(と)ま(と)目(と)の(と)ま(と)ま(と)あ(と)ら(と)ち(と)ま(と)
や(と)ま(と)の(と)ま(と)は(と)し(と)と(と)ま(と)ら(と)ま(と)ら(と)ま(と)

にわりのひやのくちハ不通ふつう一ひとまゐまゐりてらん

善ぜん申まをす書かきと害がいす

京都きょうとへ西にし宮みやに多おほき書かきてし人ひと者の代てがひりあひの
ゆめし書かきと切きり断たんして善ぜんさめおどろきあつるの
く一ひと後ごれもぬくとあひあまばきりあつるし
かご橋はしてくべきものあり孫まごバ好この理り佐さ後ごを乞こす
それか一ひと恐おそき書かきてえんて切きりぬ合あひ書かき
了し恨うらみいはずおまゐるたもぬく一ひと又また不ふ快がいと
ぬん法はふとぬしと待まちりりいぬとすせハ先ま獄ごく

舎やへ入いりまゐる三日さんじつ経たて男おとこ内うちへと出でるくのもの
や上うる孫まごくハ孫まごも父母ふぼとまゐるの悪わるふとい
や不ふ目めもわてらまじぬ某たがひ娘むすめのよハ不ふ快がい全ぜん
善ぜん也なりねよりのずいぬハ費たかて父ちちが生いかす孫まご
とやあひ父ちちハ女むすめの孫まごとまゐるしや孫まごも
しんまゐる者の命いのち法はふまゐるまゐるぬれと
ひつすくく致いたさしうばす孫まごけぬぬく
ぬぬくぬぬたがやと孫まごのちもぬぬぬん
ぬぬぬぬ一ひと後ごまゐる善ぜん判はんとせよと一ひと札せつとす

と白くくましくくみし幸舎でゆりくまひある
吉祥耕村美獣

京の南吉祥寺村了吉祥天女の園帳有り
て人巧きく田つりあり西の墨の村くより
古舞念仏と法樂くはともある鐘大鼓とび
もくしく敲きくく其響くやねをま
るん怪しく獣もあ出る百柱の椽の下に
やまやとて類して諸の口くくとあめて生輝
るあり其やうら百ハ程了似て鼻より額

また悪く項ハ白く背ハ悪く膝白く尻丸く
して法利く似る尾ハくしてあ足ハ土亀
のく後足ハ長くそ犬くひくく筒くハ
申掃のくくひくく似たりよそのく見え
る人けくになりし地室の中あり

海陽少左の歌

海陽長刀陣の町く少左あといつ信くく
日兼刀乃目利せくありあわの海宮あで
まゆもえくあゆ流くく又也あゆハよ流く

つらうし〜あ〜ぬ〜あれハ中なる大き〜
い〜と情なさけあるまゝのふまのうらむして〜
強つよ後のちと又せん〜い〜ま〜に門かどへま〜
き〜ぬ刀やいばでせん〜と折たて〜う〜ものち中なかつに
うら〜今いま一度いちど又またをよ中なかつりい〜翻ひらりぬをかね〜
あり〜家いえと出いる中なかつ〜にて袖そででしゆしゆすなりぬ〜
と〜く〜と〜して〜り〜ぬ

新あらた年のつざりい

い〜八やち町まち堀ほり居ゐる席せき乃すなはち〜
仁に檀たん〜
加か〜

多おほのれ一枚まいまいとりして〜
下した人ひと〜を〜
大おほの〜
我われ〜
町まち中なかつ出い合あふハ〜
あり〜
又また〜
その〜
急いそぎ〜

立兼中しく堪忍せむとてまじり取し出さるに
清田洋正後きこし笑し立兼がしめを玉指さう
おうたゆきとどめいせうしてや又丹の佛しりひ
又ハ哲さんとよとさうぬバまひもこのり
ゆき大虫うつりやづらこも序落也店代ハ
一月より取どし初まうハ今平歩せしすすや
命後ハ二歩入せよ是ハ海も痛べりれど楚忽
りこのせしと代入しきあまこまうて意込
ぬすべりびとけりしと也

不運の賊入りてぬとす

寛文ハ二月了し江戸小傳言町は是れ病了
て何人古き車長ゆとともせぬ二重蔵りして
まを致しちこれハ今まは音あけりし海にびして
とましとまきの者んごうめこのより名に告
すよりちまじり取し新しこれハ新人とす
名よ三千ぬ町沖ハ二千ぬぬりし秘金を
と儀くちしゆあさせらりし人ハけりて新
けり科れがまきとてとぬ町通致す

新入とよ喜函のすべぢる比鄰互も
は急度曲りて作らばきとありしと也不運
の程と也やうもれ

東行法師回国

ちよと東行とよ僧齋屋強治とよ人の
強ゆとて候とて回国とせりけり
奥州松崎とれむくとりて山崎寺にあり
取におづと別ち知と出されりて穿海と
しやと不分別のありと東行ハ西行も准て

云々ん御ハ歌とむとてとれん

私より全上人の御とせりてとれん
相上極と

とつとるりつとてとれん
獄目に候とて禁獄

とつとるりつとてとれん

妙法蓮花經とよ取の勅書

海陽庵本寺日進上人
法震筆の題目と八條

とつとるりつとてとれん
とつとるりつとてとれん

他因後水尾院妙法蓮花經の
とつとるりつとてとれん

とつとるりつとてとれん
とつとるりつとてとれん

信さそしと移らひまじしとあるればふらふ
養老先くくさそいひくすくよきそを
法衣の只所くくさそいひくすくよきそを
南無の二字とてまじりまの神くまじり
久や奏問ナセまじりまの神くまじり
くくさそいひくすくよきそを
しうばけのあなリドとて止るす

痴人伝とよめ

江戸女校東高貴の御人マヤ丸鼻とてりま者行

ほひくまふがそまじりまの神くまじり
けりとも深川松丸太長短不撰下直調とてり
してと代ハ笑るれぬ調マていぬけりして
海文音りりとも大ききとてりしとてあがりの
いふか木ヤ仲介のいひ積家のいとも不わ
てりしとてり

猫人のいひ

江戸場上等乃松家の徳水院マてりまの神
まじりまの神くまじりまの神くまじり

ゆりしありの何とていふめり死にけり葉のま
ねら南を三皇と大とていふ人々
は多ぬの猶もいへり相相なり此すや
云ふれは世のつとていふに
えん所りし元孫の中のものなり

祖父の埋む所の書女とほり出す

大坂よりしきじ安達寺町のやせ布やぬき
江別のまのまゝ其甲祖父のひしこひの
こころき代陣の村立のもの大台のもの

はひり埋むとていふとやいふ何とていふ
某とまのまのまゝにしていふれとまらぬが
やせ布に書女とていふし下座のもの
何の便しともいふざりしとていふ

祖父の埋む所令城はて難ふあり

信州伊豆郡殿家の坂ありとていふ者山お令と
埋むとていふにまやうとていふ孫の代り
おれこれとていふとていふ護の保種肥後
家老のぬきにやうとていふ鳥目と送りし

やどらるものゆとえまらあらうらぶらりし科道ま
あしとく禁獄ちりれいし

宗祇帯と咏す

宗祇法師 海西廣法のまにちまきんし帯の
ひらとてえそ

うまふり火ていふ水のりり

まのまき水汗雖しり帯をりり

うら

ほまふり火とくがりり

賤婦帯を以て西行と戲論す

信州上田とくふ駅乃ちやくに田中とくふ郷あり

ひり西行法師けしとて託盗し

髪りゆりしき女出て盗米ゆりし

うても髪ゆりし盗の米

と口すしとあひるれがふの女

髪りくが伴とてと稱区よりれ田中のうめの髪に

められハやく

野狐威よおそりく

尾州竹腰山城守の側室一 隆と瓶のうら
了 榮増と了とせて瓶の宿にしく急き増
と之をべー けりくくバ瓶増せんといふも
聖朝の筆と増りくしと金の也 古酒了
おれハいけあまを取まししと金増く
それハ海老とたありの側りく増矢く
いよーとせせれとすきバおまはて
りしとせ

鄙塔のゆゑ遺書

阿州吉成村の隨泉院ハ日暮孫一 略僧とて銀
百貫目余とくく一 貞享元年秋乃
やまひづとて増りに出で療業せー けりく
山よりし弟とよびくー 又徳嶋助任町
の百福寺とてまきと焼香導師とて
百福寺ハ弟業とてけりくもけりく
けりく老僧と志のあるへーとて願掌
とるけりく心をとて贈りとのりく念に
しけりくものりくけりくまゝ遺書

て調へ封へ至白銀十枚葉の押形で所々
了り多至りしものハ甚書よりしとてお尋ね
御多儀殿のりがらあらうて或後より一封で
ひらきるとんば葉は場ハワが田切の内盛州し
るし火葉に丁ぶ〜等じ稲とあむ〜火葉
仰く布絲二ハ銀十枚の蓋り〜はらうんし
万福寺先師の代へ銀多ふ百目〜等〜十枚の
布籠〜しゆ〜つ〜等〜七目とこの等へ急な更
〜〜程〜竹葉と切〜丁ぶ〜び祝早に齊

非更ともし〜人々呼屋やびり〜と〜のり
〜書きら〜藍の蒔紙の火葉の葉子のあ〜
のあり〜しと其位〜の俺徒々た〜
貧人令てひびひ却て換難あ〜

は〜表門次のみ〜と教が〜と〜のハ格
〜の葉し〜し〜物〜と〜也〜
地取〜と〜小判と〜十枚ひび〜家
〜急きお修屋〜びり〜元
〜し〜の蓄〜は先師〜のめ質〜

しほ者^{しほ}とてし人^{ひと}とて管^{くだり}越^こし聖^{せい}日^{にち}あふ人^{ひと}や
一^{ひと}りて銀^{ぎん}と糸^{いと}とに共^{とも}んとしはたつ思^{しん}志^し論^{ろん}小^{せう}判^{はん}
ありしは似^に合^あはしむるもそふく由^{よし}あり
まはしむもまふにたれが町^{まち}に連^つり訊^きるを
家^{いえ}忠^{ちゆう}し五人^{ごにん}組^{ぐみ}と共^{とも}日^{にち}了^{りょう}後^ご左^さ右^うの者^{もの}にそ
ゆづが罪^{つみ}しあやまのゆじと云^いへ海^{うみ}免^{めん}
てけりうまのいそ者^{もの}しき毎^{まい}ふやまの思^し
しは質^{しち}りして文^{ぶん}も候^{こう}りうくて文^{ぶん}好^{こう}も難^{なん}
所^{ところ}しそあまうりゆじし

古代質朴

成^{なり}能^{のう}隼^{しゆん}人^{にん}の友^{とも}初^{はつ}名^なとて少^{せう}名^なとて大^{だい}将^{しやう}軍^{ぐん}
家^{いえ}康^{かう}公^{こう}の兒^こ少^{せう}姓^{せい}はあまのりし時^{とき}海^{うみ}の島^{しま}に
そめんあまの表^{あは}ハハらん小^{せう}まんにあのこんと竹^{たけ}裏^{うら}の
菊^{きく}そあいにしゆじしてそふせ出^でらるるに案^{あん}のあま
の兒^こ少^{せう}姓^{せい}いごのり羨^{うらやま}しとや合^あへり又^{また}後^ご府^ふの
沖^{おほ}津^つ津^つ管^{くだり}の町^{まち}虹^{にじ}のあの人^{ひと}をし所^{ところ}知^ちりまぬり
大^{だい}将^{しやう}軍^{ぐん}津^つ津^つ人^{にん}くまひく隼^{しゆん}人^{にん}の下^{した}下^{した}部^ぶせぶのハ
何^{なに}もそふせふも宣^{のたま}いしは類^{るい}して津^つ津^つ人^{にん}の細^こ

苗深の二部で二部よりして今に抄傳入て
かの家了りしとる

同越の名回越遠鴻

尾州の多々大隅とりふ人上へりて
の縁但てせりしうは黄門公清義所りて政
易とゆひたりしは増綱のりて先畚田大
回越斎了り内儀せりし回越斎のりし
これも回し越りしは又まるともゆひ
人のうへりしはまきりるれは回越と名けり

いにしえまねりしきよはびもゆしと人
叫りき

新著聞集

雜夏篇第十八

鳳来寺 夜叉 髑髏

冬の日本中ノ 杜鵑の尸と見ゆ

弘法大師遺訓

源氏の髑髏

阿波二大髑髏と云ふ 出ず

十八檀林

大砲光と云ふ

牛乳生と云ふ 夏にハ 秋と告

非人詠歌

安土問答

佛種用と制す

曼荼羅丸

北陸昨在国の字流布

熊坂の牡丹花の詠歌

兩頭の亀

明人の子孫

圓光大師石面名号

富士の雪今古の異

毒よ人と酔す

猫博生と告

大小歌子

幡随和尚葛衣名号

土佐高知大龍家セヤボ

御製衣の和哥の

一口残翁

暖甲虫と生く言とついでゆとく

鳳来寺塚夜叉髑髏

三州設楽郡煙巖山鳳来寺の南山に新修の
中しき屋敷に鬼塚と云ふ一仕へると云ふ所
仙人鬼之告ありて我を後ゆつて所を
くそそそそけ山の猪もたのびやうやん疾く
神をんちて御仏をうやむとすくめま則
おづう鬼の首を切て葬りてありて也
ひの御堂ハ元和古より回禄せし假堂に
ておびしき武田より武田より

つりし想まぢりつり太田倭中ちりく歌司に
に原ととあとの甲斐庄をちりよのたのく城よひ
て板屋の北形とけまいたるもあいにゆりま
石の面とけりかゝりておれればけりけり
一尺どちりの體躰あてつりし皆人ねとけり
つりしとありに寺傍のそくこれるん縁起
あつりその鬼の首つりしけりきとつりく
つりしつりかたつりしに望とせき

冬の日本沖に牡鵲の卵とては

信州まきぎの益は作ちとよ者の下へ冬の日影
とつりありに節末のけに節公の死りとて又出
らんハ葉福了もあつりて箱又し
かま後ハあつりて志れし聖子の三母の末はふの葉
ひつきつり六件の節公飛出てけりにまきぎの
歌

秋のつらまふこりの節公其を海とてつりあいに
とのつりしハ秋より後まきぎのつらまふの中
強きつらまふ又冥途のつりしつりしつりし

獲へしまらふやとなんし

弘法大師遺訓

弘法大師 悔ふ事 入滅して 萬んとして けの
作しとて 日我山ハハレ 真言成就の地おし
又ノ宗宗と 建立す へつじ 假し 念仏ハ制の
外あり 空法ハ 和ニ 三昧 立日ハ 入定す
真言の行人 念仏の者 二つあり 海客の志を
生じて へし しの ち 乳の 符号ハ 三在 法仏の 法秘
あり 真言の 念仏の 成仏の 事なり とい

源氏の鬮籠

延宝三の ち 源氏 法水 して 取く の 山く 下れて
けり 三尺 七寸 の 鬮籠 あり 此 一 葉
の大 寸一 寸八 分 あり 有り 表裏 少 少 少 少 少
と あり 其 葉 一枚 あり 鬮籠 ハ 本 の 取に
埋め しの しの しの しの しの しの しの しの
あり し ハ くれ あり あり

阿波二大鬮籠とけり出す

阿波 勝浦 郡 大 子 代 丸 觀 音 堂 の 修 後

何し多ス〜しを 聖日やまわま〜に又次乃日
系より〜刻〜るも〜人のおまゝ〜て
〜の判然ある〜新ハ〜寺ハ
何し〜しとれ死が〜ハ
おとろも〜く〜の〜と〜
〜の〜を〜し〜ま〜あ〜と〜い〜む〜し〜し〜
この寺よれ〜し〜り〜る〜

非人 詠事

元禄り〜め比〜その非人の〜り〜

非人の非人〜

〜の〜人〜の〜世に〜曉の〜

〜の〜の〜の〜の〜

安土問答

何れ安土問答の〜ハ世〜が〜り〜

託きんも〜し〜れ〜も〜乃 批判者

定ぬ〜の〜ハ字〜野土の〜の一抽

唐紙一枚〜し〜く〜し〜

海の〜し〜し〜し〜し〜

るるは日本大法王聖徳太子説法明眼論に
速欲出生然願憤根本一業當知一業正義佛心
是也若不足學一業而此生於者無有是知然以
朕是法華持者也由之よりし法苑の文
ハ由之より花叢了りしと共れ太子大法王の
御りもんやと批判ししはあまといふ時其安ん
日夫へよみていづく軍樂子其然其然の文に
詠ふの徳徳や下しは御りもんの妙の一業の
捨ちしをせしむるゝ又あまのわく日蓮宗の

妙とせしむる多ししを執いんといふは
あまの御りもん又大法王批判ししをいづくこれ其然
妙とせしむる又白りかたに其然の由きと辨を
きばあまの御りもん又大法王批判ししをいづくこれ其然
嘆ちしをいづく又大法王批判ししをいづくこれ其然
不須説我法妙難思ゆゑも妙の不干舌
るるをいづくいんや又あまの御りもん又大法王批判ししをいづくこれ其然
るるをいづくいんや又あまの御りもん又大法王批判ししをいづくこれ其然
大居士批判ししをいづくいんや又あまの御りもん又大法王批判ししをいづくこれ其然

此法の妙なりハ十妙ニ千妙ニ千妙ナドて百廿妙
なり一にこれハ法相の妙なりバ心り取捨の法
と云ふ所の法もくはる時日難等廻り下れば
貞安也と云て法花の妙と云ふは云ふと云
て早先吾人ぞくくめとして蒙衣衣蒙て刺
ゆるらくは時々の批判者ハ南禪宗の法相
難老りしゆめ十界因果大居士も吾人まじら
るおれ又吾人よりし一人ハ和州法隆寺の
法相の法相の法相の法相として大居士維ナ經子

了り時の所通なり又吾人の秀長老は修了りし
西堂の法相の法相の法相の法相として大居士
法相の法相の法相の法相として批判せんそ
黙然と云ふなりと云ふに知らるるを云て
大居士も人して判るなり天道くくする
をわらひの法相の法相の法相の法相として
信長及軍の法相の法相の法相の法相として
法相の法相の法相の法相の法相として
法相の法相の法相の法相の法相として
法相の法相の法相の法相の法相として
法相の法相の法相の法相の法相として

抄ん了後了 諸製一 和して丸くすく名を曼
荼羅種之と云んて其の及儀と説く
了其の至信の人其の授日了 光の如くヤキ所の人の
悉くしてその移くすの所の人の増長して大願と
すの所の人のすすくして小舍利を現すの所の人の妖
怪の所の人の怪乱して沈病せし人のすすくして
て頂裁しおとすの所の人の咽にほきみくすの所の人の
すすくして不祥と云ふも其の西念の所の人のすすくして
愈して善者とすの所の人のすすくして終るす

と云ふは其の所の人の利をすすくして其の者世了す

吐達野正身宗流布

元禄年中に西より乃比ふかこに其の如きの國誰人の如
おとすの所の人の吐達野正身宗流布と云ふ門戸に
くすすくして一切の災難とすすくして其の如きの如きの如
ひの所の人のすすくして其の如きの如きの如きの如きの如
し其の如きの如きの如きの如きの如きの如きの如きの如
り其の如きの如きの如きの如きの如きの如きの如きの如
とすすくして其の如きの如きの如きの如きの如きの如きの如

ゆゑにのびるまへに人かたのつらさハいふまゝに不妻
きりゝのうゑくんとまゝ又寝て誰の寝るとのめく
雲下江一首の和歌やせんくれ

社
あつちのてやれぬまゝ一巻あり

怪
あつちのてやれぬまゝ一巻あり

昨
あつちのてやれぬまゝ一巻あり

丘
あつちのてやれぬまゝ一巻あり

圃
あつちのてやれぬまゝ一巻あり

あつちのてやれぬまゝ一巻あり
熊坂のてやれぬまゝ一巻あり

あつちのてやれぬまゝ一巻あり
おのひのみに苦程公おつちのてやれぬまゝ一巻あり
あつちのてやれぬまゝ一巻あり

あつちのてやれぬまゝ一巻あり

わが強敵乃悪黨よのりしやと驚き山乃驥
ふしかくてききんたつるあふさき人感
しあふ

兩頭の小龜

定宝よのよ有六久保如雲さ久の他より高野の
龜出さしと照覚の後判りく下され一甚
毛一すはるくす巧し

明人乃孫

ふはき海金河田中七左衛とよまふ大月乃

鄭一官うま國姓爺のあつる錦舎お
つハ伯父うま父母より之英雄として韃靼人
少海まぬいよる渡海の新状をて海乃で
末朝セーハ定宝七の八月乃るうま

丹光大師石面新野

七坊の巫お方の浦世了野根とよま水産
了丹光大師は乃新野をよかき
まぬおひくハおりしとまぬよいひはくしに
をひの妙の中よりほう印をよに南無の二部よ

きつてりしとせ

富士の雪今古異説

貞徳乃い〜少〜此等進士の連哥にたの〜
し〜と〜〜初書と〜し〜し〜ら〜ゆ〜也
誹諧了〜し〜此等雜り〜し〜も初書也
〜し〜其〜宗祇宗長も雜了〜し〜
と〜よ〜素人の曰子の体乃歌と新古今の各れ
部了〜し〜れ〜家際乃時百首乃系
用ひらぬと〜推量〜し〜各に巧い〜定と

し〜と題和哥撰者の意思と〜し〜びら〜之撰集
了〜ハ種々のありし〜し〜や親古今の部立
と〜し〜万葉卷三了

少〜根了障つし言ハ山を舟のまぢら〜て〜
の〜と虚言了了〜べき及理ハ〜び〜雪〜曰
梵灯菴乃袖下掛了〜し〜少〜の雪雜り
又兼載式乃百四十六首乃中了了

の〜の雪の多〜し〜の根了障ハ雜り〜
少〜の雪雜りも初書も斯〜し〜

この御首と出されたり又新撰寛政集藪の類は
宗伊法師

とて珍しくも、
よ集の後拍原院清光宗禪法師の詔行で
撰まれりたり、
今で見たりや、
紹巴昌叱の御書

毒州人ぞ辨す

寛文七年三月十八日に、
此の御書、
此の御書、

謗語をいひ物つきの話をして十日の間に
流しぬる者のいふくは、
おぼろしき言なりと、
くろくく、

猫撫生とつぐ

大坂のおう大通といふ、
移り寛文十年の御書、
しと不便あり、
成佛の御書、

のや告宗一と華らり〜そのと十三日入て
回舟回舟のゆめ了 猶き〜して思め〜いり
御不虎了〜生れ〜ゆしと昔〜とらり

大小男ふ

南船信信香ありあまらう石力いんぎんとてたあ
ちんあす 扱つか墓かみたちとて長三天一すり男おとこを
あしとて連とぬり〜書かきあり右の袖口そでぐちう
墓かみたち入て左のまゝとあま出〜海うみにさる
及およのまがひりり立たいすのゆ〜いすをさるり

幡隨和尚葛衣名号

幡隨和尚ばんずい館林善導寺くわんりんぜんどうじに任職にんしやくしきふふとま
門かどおの老婆らふはひり衣服いふくとろひまのりせと
感かん〜ぬぬり〜惟ただふり了り 研号けんごうとあまあま照あき〜とせ
まふふのら壇だん通つう和尚おしょう任職にんしやく〜とらり
みよづ〜研号けんごうと惟ただふり了りあまぬぬり〜老
姓せい了り研号けんごう 幡隨ばんずい和尚おしょうの惟ただふり了りあまぬぬり
あまぬぬり切きらして法ほふ人にん了り 絶た〜ぬぬりぬ
らんとせ了り 惟ただふり了り 研号けんごうとらり

土佐高知大龍家と破る

土佐の海入日本の南極より一歩のふり烈しき
元禄十三年の六月越後白鳥の嶽の妻取に法皇
列聖しして所し上嶽了龍のいらかりし風
撫くたうして海天了龍と流しつるまじく
了るるすりや大りとも嘆きあつる
思回又帝とり人扱了るも空や又所を以
長三丈りつるもつるんとたけり大龍やとも
真黒くして鱗 白銀のぶく 眼金也のひり

まて日の影了映しややきほの足とのびて
中了涙ぎりり夏取のしりりるしをねを
しとまじく眼び 其ねを流しさえも
そのさきほひ了風たさるるうやけもよま
まな一時的くさふさきやうと少松糸をわとり
人の吐息了けりくさしりり又帝の極き
あぶれくもさきとんごり

神教乃和歌

元禄十三年の秋乃まじく仙洞乃神教りりや

せうせうぬいさう了 醫方巫方もけいんさう
さうりしうばさうやう 法名の一冊 何ぞして
はあさうさうせうさうさう

ぬさうさうさうさうさうさうさうさうさう

一口残翁

日光山のうすとい百案案の老翁 何ぞして
厭と名つさうさうさうさうさうさう
あの名い何れも言のひびき何れとさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう

うてはさうさうさうさうさうさうさう
一口つものさうさうさうさうさう

腹中二地と針一言とひく物と食ふ

京西あさう山二條上町 尾風々長たあといさ者
乃さ長三糸とて十二糸ふさうしえん
さうさうさうさうさうさうさうさう
腹中一腫れ乃口はきて甚口さう
言便あさうさうさうさうさうさう
いひさ食い何れさうさうさうさう

いゝやもて押へて噉さげりもれが太熱たう
あゝくろ悪口一罵辱しめりう医胸代ぐ
まうて巧てはくししがど何のそりしやりしふ
まゐるおらび菱舌塔とて博識乃う進退
ろんそくけしてびつろ人本朝ろハいさしき
ゆゑ美朝の書典ろえゆりしとて種は
業集と件の口ろくりせ識てやまがいのそ
喰ばりりのでみせ種巧のめ強弱ししゆめ
あまひやうおひくくくろ悪口せんまれ

下にもいひくく眼用しあそそ本へにそ
か多吞せもれハ一五日ろぞんくに件カハ
乃うあかき食わもやう中に喊おく十日
とかくして糞門ろり長一尺一寸額ろ箱
一本ろてその形雨童のろろり者飛出
して即ちろろ報しそろ

明治廿四年壹月求版

知恩院古門前石橋町

澤田吉左衛門

寬延貳巳己三月吉日

新著撰集大尾

淨土宗
總本山
書籍調進所

知恩院古門前石橋町

澤田吉左衛門